

SSKP

たこの木通信

440号

(2024/6)

中ちゅんいちひ
かきじあり



100000円.

暑いぞすね〜

電話：042-389-1378

E-MAIL：takonoki@dream.jp

ホームページ：https://takonoki.net/

郵便振替：00100-2-24685

第一回「知的障害・自閉の人たちと「かかわり」の社会学三井さよ講座」のお知らせ

第一回目のテーマ 「第2章 就学運動は何をとうていたのか」について

日時 7月14日(日) 13:30~16:30

場所 多摩市立関戸公民館 第2学習室 京王線 聖蹟桜ヶ丘駅前 OPA ビル8階

参加費 無料

定員 48名 (先着順) 会場の定員が48名のため当日定員数を超えた場合参加できない
可能性があるためお早めに参加お申し込みください。

申し込み方法 電話(留守電可) かメールにてお申し込みください。

定員しだい締め切りとさせていただきます。

電話番号 042-389-1378

E-mail. takonoki@dream.jp

zoomでの開催は予定していません。

陸上競技場のトラックの長さは400メートルだそうです。400メートル、これが世界の標準だそうです。ですから五輪種目の1500メートルを走るとなると3周回ってあと300メートルでゴールということになります。「第2章 就学運動は何をとうていたのか」を何度も繰り返し読んでいると半分の200メートルが発達保障論(養護学校がいいっていう派)でもう半分の200メートルが共生教育論派(養護学校はダメっていう派)そんなトラックをぐるぐる回っているような気分になります。発達保障論派と共生教育論派は対立していて1970年代から80年代にかけては論争なんかでもメチャメチャ激しかったらしく「君はどっちの立場なんだ、立場をはっきりしてものを言え！」なんて感じで、どっちつかずではダメで、どちらなのか立場を厳しく問われたようです。昨日(6月18日)、岩橋さんに1980年代とかに発達保障論派と共生教育論派の激しい論争の場に実際居合せたことがありますか?と聞いたら個別でその人たちと直接に話をしたり聞いたりしたことはあるがそういう激しい論争の場を目の当たりにしたことはないと言っていました。もし岩橋さんがその激しい論争の場に居合せていて立場なんて聞かれたりしたらなんて答えたでしょうね?。「私は発達保障論者でもなく共生教育論派でもない」とか言って話が余計ややこしくなりそう、うわー、めんどくささ。

でも「第2章 就学運動は何を問うていたのか」を読んでいても当時の激しさという感情的なものはあまり伝わってはこずむしろ発達保障論派と共生教育論派はお互いに理論整然と対話をしているかの様な感じでつい読んでしまいます。発達保障論者が言っているのを読ん

でいる時は全くその通りだと思ってよむように意識して読んでいます。共生教育論者が言っている時も同じです、共生教育論者の言っていることはもつともだと思うよう意識して読んでいます。そんな読み方をしている私に「あなたはどちらの立場ですか？」なんて聞かれると「今、ちょうど7周半して共生教育論の真ん中くらいにいます。」と軽々しくついそんな感じで言ってしまいそうです。

発達保障論者と共生教育論者が互いに同じ目的に向かって理路整然と対話を続けることができたなら。やはり著者は読書に第2章をそう思いながら読まずにはいられなくなるような演出が施されています。

第二章の題名は「共生教育論者は何を問うていたのか」でも「養護学校反対派は何を問うていたのか」でもなく発達保障論者をも含む(包摂ではない。あれ?やっぱ包摂?)「就学運動は何を問うていたのか」となっています。

7周半して今現在(6月19日明日はたこの木通信発行日、あさってあたりは発達保障論者側のトラックを軽やかに私は走っていると思います)共生教育論側に立っている私としては「共生教育論者は何を問うていたのか」「養護学校反対派は何を問うていたのか」でしたら私は17年間たこの木にいることによる経験上身をもってその問いに答えることができます。正解かどうかは別として。例えば小学校、中学校の教室においてその教室の在り様を対案があろうとなかろうと常にこれでいいのか?と問い続けるそんな存在、そんなめんどくさい人間を排除してはいけないということです。私は民主主義者で民主主義が好きです。そういう人を排除するとあつという間に民主主義は崩壊します。論争状態、戦争への道です。今の学校の在り様に満足していて例えば勉強が好きで面白くて、そんな常にわけもわからず教室の在り様をこれでいいのかと問い続ける人が邪魔で本当に耐えられないのならばその人が他の場を探せばいいのです。それが民主主義だとたこの木クラブにいてて思うからです。

7月14日多摩市聖蹟桜ヶ丘のオーパビル8階の学習室で、三井さよさんをお招きして、就学運動は何を問うていたのか?、発達保障論者 VS 共生教育論などをテーマに参加される皆様と楽しくおしゃべりをしましょうという無謀な試みに挑戦したいと思っています。7月14日実はたこの木地域で会場が取れなくて多摩以外の場所でいいかと三井さんに聞くと第一回目はどうしても多摩でやりたいとのこと。困り果ててた何日か後にキャンセル待ちで会場を抑えることができました。オーパビルといえば本書に登場するりっちゃんが「風」という店で働いていたところ、そして目時達也がその地下のスーパーで買い物したり、出禁になったビル。「三井さん! 私たちも参加するから」と彼らが会場を取ってくれたのかもしれない。彼らとともに楽しいひとときをオーパビルで過ごしていただければ幸いです。 横田

「新措置制度」に抗するには

2003年の支援費制度へ移行から早20年が過ぎ、「措置から契約」という形で様々な制度は、サービスとして当事者が利用する形になっています。

「措置」とは行政処分の一つ。行政が認めたものを、行政が指定する形で執行されるものです。

一つの例として今日のヘルパー派遣は、措置の時代どうであったかを振り返ってみたいと思います。

「契約」に基づく今とは違い、行政が認め決めたものが当事者に与えられるという感じです。(それ故に、行政との交渉が頻繁に行われていました)

私とヘルパー制度と関わり40年になります。その当初、「ヘルパー派遣」ではなく「家政婦派遣」と言われ、「介護」は含まれず、行政は今でいうところの「家事援助」のみの制度としていました。そして、家政「婦」は、女性の仕事ゆえに男性の私が担う事はできないとされていました。その後男女機会均等法ができて、男性も関われることになりました。

しかし、介護までは認めない行政。入所施設を出て地域で暮らし始めた重度身体当事者たちは行政に訴えます。「介護がなされなければ地域で暮らしていけない」と訴え、身体介護等が認められ、その後移動支援も認められるようになり、日常生活支援からの今日における重度訪問介護へとつながっていきます。

それらは、行政が認めないものに対し障害当事者たちが訴え勝ち取ってきたと言えます。

今の、ヘルパー派遣は利用者と事業所との打合せで、派遣を受ける日時や内容を基本当事者が決めることができます。

措置の時代は、当事者の希望はある程度間くものの、基本行政が「○曜日の○時～○時」と決めたものに当事者の側が合わせなければなりません。故に、当事者たちからは、「ヘルパーが来る時間だから帰る」という声を何度も聞きました。そして、もしその時間に帰宅できなければ、変更は許されず「当事者都合のキャンセル」となり、次回まで派遣を受けられなかったのです。

ヘルパーは、行政職員が直接担当か行政が委託した「家政婦紹介所」等から派遣された人しか許されませんでした。

その中身も行政が決めた範囲でしか受けられず、やってくるヘルパーにやって欲しい事や困っている事を頼むと「わがまま」と一蹴されます。それでも、強く訴えると行政は、委託先の事業所に改善を求めるのではなく、当事者に対し「制度の範囲外の事は頼まないで」と当事者の側を説得するのです。

当初は、ごく限られた時間でしかなく、制度で管理されることはありませんでした。しかし、限られた時間ゆえに、そこを軸に他の時間の過ごし方を常に考えさせられました。

「行政が認めたものを行政が指定する形で執行する」措置という制度では、行政が認めないという事は、必要なことは当事者やその周囲の人たちで何とかするしかなかったわけです。

逆に、行政が認めれば広がるという事で、行政とは何度も交渉という形で派遣の内容や時間数や派遣方法等をめぐり改善を求めてきました。

女性しか認めなかった時代、「書面上女性なら良いのだろう」と、私の性別を女性として家政婦紹介所に登録するという荒業を使ったこともあります。

行政が委託した事業所からの派遣しか認めないというならば、見つけてきた介助者を皆事業所に登録して派遣を受けるという形にしました。それは単なる書類上の話であったのですが、事業所から介助料を受け取る形は、事業所が優秀と思う人材を引っこ抜く機会を生み出したため、事業所登録ではなく行政と直接やり取りできる推薦登録ヘルパー制度なるものも作りました。

ヘルパー制度だけでなく介護人派遣事業等他の制度も含め、措置の時代においては行政と対峙し、当事者の暮らしにおける公的介護の保障を勝ち取るやり取りが積み重ねられていました。

私は、そういう措置制度の時代を約20年関わった後に、支援費制度へと移行し自立支援法を経て今日の総合支援法へと関わり「契約」という形での介助派遣も20年関わり続けていることとなります。

「措置から契約へ」それは、行政が認めたものを行政が決めた形で執行するのではなく、当事者一人一人が、自らが必要とする介助を自らが決めた事業所と契約を結び、利用できるようになったという事。

又、家政婦紹介所に仲間を登録したり、別建ての推薦登録ヘルパー制度を作るのではなく、仲間たちで介助事業所を立ち上げられるようになり、自らが見つけてきた介助者を自らが作った事業所からの派遣とできる。移行した当時は多くの当事者たちから契約制度となったことを歓迎したと思います。

ただ、「契約」となったからと言ってすべてが思い通りになったわけではなく、様々な制約は残されていたので引き続き行政との交渉が続けられていました。

例えば、派遣時間数の制約は大きく、「行政が認める時間数」しか利用できない点について当事者自身が

必要とする時間数を認めるようにと訴えて続けました。又、措置の時代には、たとえ時間数を認めても「委託先の事業所が派遣できない」という理由で時間数の増を認めないというおかしなことも、時間数さえあれば事業所で人を集め担うという事ができるようになりました。

又、時間数の算定において、行政が認めないものについては時間に含まれず、自立生活している人たちは行政が認めない事の支援を一体だれが担うのか！と訴え続けています。

サービス等利用計画についても、週間プランはあくまでも時間数の積算根拠としての資料であり、プラン通りの暮らしをしているわけではないという事を何度も確認する。相談支援事業所は、これまで行政が聞き取り調査をしていた下請けではなく、あくまでも当事者の側に立って必要となる支援を明らかにし、支給決定は行政の責任においてなされる事を何度も確認し、納得いかない支給決定については、相談支援事業所ではなく、行政に対し納得のいく説明を求める等。

制度実施の主体は、措置であれ契約であれ行政にあり、当事者たちが地域の中で暮らすために必要となる介助保障は行政に責任があり、常に国や行政が当事者の暮らしを保障することに努めなければならないと考えています。故に、日々直接的には各事業所とのやり取りがもっぱらとなりましたが、公的介助保障をめぐるは今なお行政との話し合いが続けられています。

なぜなら、区分認定や支給量の決定は行政の側が握っている。昨今の人手不足の状況は様々な立場で何とかしなければならぬけど、公的保障は単なる金の話ではない人材確保も含めた行政に責任があると考えます。

相談支援事業所も各事業所も、当事者と関わる中で当事者とともに行政に対し物言い続ける事が必要だと私は考えています。

例えば、重度訪問介護の対象拡大はなされたものの、その中身については更なる改善が必要だと考えます。中身の改善は各事業所が勝手にやれるわけではないので、措置の時代とは変わらず行政とやり取りしなければなりません。各種制度はできたものの、当事者の暮らしは制度によって輪切りにされてしまっている点をいかに解決するかという課題。日中活動や仕事場に通う際、当事者単独で通えない場合何らかの支援が必要だが、事業と事業の狭間に入り込み、結果「通う」という支援がないから選択肢が狭められたり、あきらめたりする事が起こっている。想いはあっても人手がなければ何も始められないという大問題も抱えている。

そもそも、長年行政と対峙し取り組んできた自治体とそうでない自治体との格差は大きい。

支援費制度への自立支援法へ総合支援法へと制度や法律が変わる時、国は「地域格差をなくし」という事を言うも、一向に格差がなくなることはないのは、国や行政に物言う者がいて進められてきた故の結果で、国や行政自らが主体的に取り組んでいないからこそ起こる結果に思います。

いろんなことを端折って振り返ってみましたが、措置から契約となった時代を知る人たちが年々いなくなり、純粋に事業として担う人たちが増えている状況。

想いをつなぎ懸命に担う人たちがいる一方で、単なる儲けのために取り組む人たちも増えている状況。

何はともあれ、人がいなければ始まらない面もあるのですが、障害当事者たちが私たちと同じ社会の中で暮らし続けるために必要となることをさらに願い追いつめるのではなく、「事業」という形で、「利用者」という対象者を定め、行政に言われるままに、行政にスキを与えないために書類や経営の方に力を注ぎ当事者は二の次三の次になっている状況も見え隠れする今日。

支援費制度から20年。すなわち事業所による派遣が始まって20年。始まった当初は、自らが担い手となれる事を歓迎しなのだが、20年という歳月は、それ以前を知らない人たちによって事業の中心が担われるようになってきているという状況。

そこから生まれる「新措置制度」という話。

単純に考えて、措置の時代は委託された事業所から介助者が派遣されることを問題とし、当事者との直接的な関係の中で介助が受けられるようにと努めてきました。それが今、行政との委託関係ではなく当事者が立ち上げた事業所であっても、再び事業所による派遣という形になってしまいました。そのことで起こる不具合を多々耳にします。

当事者が暮らすために必要となる介助保障。それは、介助を担う人たちの暮らしも同じく保障されなければなりませんと考えます。

しかし、後者に重さが置かれたり、「福祉ビジネス」と称し「儲かります」とコンサル業者が現れ、儲かる事業を紹介し、儲からなくなったら他の事業への鞍替えを勧める。そうして「利用」する側は苦しい立場に追いやりられ、その実情を知る真摯な取り組みを担う人たちの下に支援の依頼が集中し、共倒れを招いていく。

そんな現実を垣間見る中、公的介助を保障すべき行政は、本人が望んでもいないサービスを紹介し、紹介を受けた事業所は、当事者ではなくより行政とつながり「運営」を担う。本来当事者が主体的に暮らせる仕組みを築こうとしたはずなのに、どこか新たな形で行政が認めたものを行政が認めた形で進められているように思うのは私だけでしょうか？

ヘルパー派遣のみならず様々な「サービス」によって築かれているものについて、次号から探っていきたいと思います。

岩橋

社会へ向けてその3

立野 陽太

ゆたかカレッジ早稲田キャンパスでは五月三十一日に余暇活動で東京ドームシティに行きました。今回の余暇活動は東京ドームシティのアトラクションのフリーパスを買う班の人とゲームセンターなどに行く班に分かれて活動をしました。ちなみに私はアトラクションのフリーパスを買うことを選択しました。集合場所はビッグボックス高田馬場に集まりました。その後班毎に行動しました。私たちの班は3年生5人で、早稲田キャンパスの職員1名でした。ちなみに乗り物はジオポリスゾーンでは「バックダーン」、「ガンガンバトルズ」、「ウルトラセブン(ザアトラクション)史上最速の作戦」に乗りました。パラシュートゾーンでは「ウォーターキャノン」などに乗りました。ラクーアゾーンでは「ビッグ・オー」などに乗りました。このゾーンではお化け屋敷にも入りました。

「もう6月だ」

いま七夕祭りのニュースがきになる。不思議な神様のお話

私が真面目なのか？古事記日本書紀。縁結び神社のお話風習どうやって村を守ったか？妖怪の話は怖いとかでしかないが。こんなに困ったとき村人は老若男女そうできて、逃げなかったもの。妖怪かな？と言えば鬼太郎のまんがの名物は友情と勇気だ。鬼太郎は困ったときあきらめないで助けてあげるただ親切な漫画。それが語り継がれてきた、助けてもらった人が語り継いだのか？苦しんでいる人になにもできなくても伝説の勇者は確かにいたと。風の谷のナウシカは原作と映画では違い、二つ見比べた。魔女の宅急便映画では原作の通り。アニメはやはり原作からかえたそう。何を变えたかは。困ってる時にナウシカやキキは助けたが。その人が違った。ナウシカは仲間外れにあった人に食べ物を届けた、無償の愛かな？キキは病気の子どもの象をお医者さんがいる嵐の海を超えて、魔法でホウキで飛び連れていく。ジャンヌダルクみたいな看護の精神かな？受け付けが断るとお医者も学校もみしてくれない。私は高校から受け付けで断られて、勉強に進めなかった。親も含めて、昔自分等はまずしかったから大学へ私が進み大卒になったら。自分等は高卒だから頭に来る。もひとつあり。赤ちゃんのときから大人に強いられ。今社会が何をしたいのか？とう。働いて下さい。というから会社にパートに出て、怪我させられたり。在庫狂った責任や。レジあげさせられて。狂ってるからと管理職がするしごとに対してからかわれ。たらい回し。私が介護弁当をとれと訪問看護に言われて断ると、一人でできるから手伝わないと。くり返しは。在宅医療介護もしなくて誰もみてないから受けれるサービスしなくても。きがつかなかったですむ。神社で祈祷したら。悪いことしても閻魔大王にさばかれない。心理だろ。そんな時妖怪は。諦めないで、聞き入れるのか？お墓も神社もお寺も魂が歩いている。たくさんの魂を探せばおじいさんもおばあさんも。もしかしたらお姫様も侍もお坊さんもそこにいるし、人間が意地悪しても亡霊になった親切な医者が私に治療してくれたり。スーパー店員がいじめても。幽霊店長がレジうってお買い物も助けてくれるかも。AIは人間しか対応ないが人間は霊魂だから幽霊が町にいないなんてことはない。動物に乗り移りアドバイスしたりはあるかもね？なんて。妖怪の話が楽しい。祈りから気

がつくことがあるのか？誰が靈魂や精霊の話をするようになったか不明だが。戦争でほとんど親戚がいないため。よく夢に親戚がきて話があるため。昔を思い出す。ただ人間の話なら美輪明宏の黒とかげの舞台が流行ったとしに。渋谷カリスマたちは確かに美容や綺麗にしているのだがいまだに障害者を助けたり困ってる人を意地悪とか無償の気持ちで助けてあげたこと。に対して。綺麗だよねと思わなく。介護職員で働いていることはあっても。汚くならないような自分の工夫はあるけど、介護して汚れたり、障害しいじめて汚いのをみたらきもい。とみんなで笑う習慣を綺麗な洋服でいる自分であれば自分綺麗だわ。という感じ。綺麗であることにこだわるだけで、困ってる人を助けられない自分は汚いやつだと悩まないらしい。コペル君によろしくが流行ったとしに。精神科を出された。あの流行を覆したかったのか？正義には勝てないと思ったかな？私は助けて下さいと言葉にしたことがないとは言えない。困ってる人を助けようと思ったことがないとは言えない。汗臭いあの人臭い人だ。ということがあるとかないとか？臭い人は嫌だ。思えば介護は臭い人だらけ。あなたなんか嫌いだ。こないで。とか言われたり。泣いて抗議したり、私はかわいくない？とか人にどう思われてるか？気にして泣いたり。嫌だ学校に行かないと登校拒否。泣いてすがりおばあちゃんちに一週間泊めてもらいなだめてもらい。いじめてたこがこなくなったから。終わったか？みにきた時に。悩まなかったと伝えて怒られた。私は臭い匂いがしてきてそれで臭い人でしかないから。卒業式は答辞を読む人に選ばれたが三組の中でいやがる人がきて、断り別の人を選ばれた。連帯を組んで断られて。かなり臭かった。タバコの煙は臭い。何が良いのか？とかコーヒーとタバコと背広きたサラリーマン。けどゴリラマンの漫画おもしろかった。少年マガジンや少女漫画は暇なら全部読みたいほど。源氏物語はエロ本のイメージしかない。高貴なアダルト漫画はなんか憧れるやるいるかな？と想像臭い自分。匂いがする臭いがああ源氏物語はエロいときお香のいい匂いはおしゃれた。黒髪いい匂い理由はお風呂は貴重でたまに。臭いからデートならいいかおりの香水つけて。ラブレターかいたり。そんな人はいたのか？疑問。かぐや姫は源氏物語にいないが髪の毛が長いしモテモテ。いない人を美しいストーリーで語り継ぐ。匂いと妄想文化引きこもり日本文化。農工民族のせいだろ？筆寄 2024年6月

支援の連続性を考える 最終回 ～終わらない連続に～

「連続」とは? 「連なり」「続く」という事。

「連なる」とは?

- 1 たくさんのものが1列に並んで続く。切れずに続く。
- 2 会などに出席する。列席する。
- 3 関係者の一人である。その団体などの一員である。
- 4 関係が及ぶ。

と、ネットの辞書に書かれていました。そして「連続」とはこれらが「続く」という事。

1 と言えば、日々時系列に並んだ人の暮らしがあり、切れることなく続いている。
2 と言えば、決してその人一人で暮らしているわけではなく、職場であったり自治会等のご近所づきあいであったり、趣味の会やネット上の〇〇会員だったり、個人何らかの形で有形無形で所属している。そして3について言えば、単に所属しているのではなく、人格ある者としての一員であるという事。そして、4について言えば、一方的な関係ではなく、互いに影響しあう関係があり、その人の存在が様々な影響を周囲に及ぼし、その人もまた周囲のから影響を受けるという事

が、これらが障害当事者の暮らしにおいてはどうか?この間様々な事柄を私自身の経験に基づき書き綴ってきた。私たちとは異なる位置や思考に置かれている当事者たちの存在を常に感じつつ、当事者たちは私たちと同様に時を刻み様々な経験を積み重ねた結果としての今の言動だと思う。ところが、私たちはその時に目の当たりした行動のみで当事者の状態は思考さえ読み取り、行動の対処のみを支援としてしまう機会が多いように思う。所属する場を選ばず、スタッフと利用者という形に分けられ、一人の人格者ではなく対象者とされているように感じる。日々の営みは連続しているのに、支援の統一が図られたりもする。当事者の存在が私たちの価値観や概念をも覆すものであったとしても、社会が受け入れなければ当事者の存在全てが否定されてしまう。

私の日常では障害当事者ではなく「〇〇さん」という固有名詞を持ったその人と連なっている。私自身は研究者でもなく専門家でもなく、自らの経験に基づき私と目の前に存在する「その人」との関係の中で思い描いた事を書き綴っているだけの話。でも、たこの木通信等で書き物として世に出ると違った捉え方をされる。

各々が考えるきっかけや思考のヒントにしてもらえるならば幸いに思う。そのことで導き出されたものが、各々の関わりに置いての一助となればありがたい。そして、各々の場にある「連続性」を交換し合う事で互いが深め合いたいと願う。

逆に、鵜呑みにされては困ってしまう。私に関わる人と読まれた人と関わっている人とは全く違うし、同じ人であったとしてもその人との関わりも固有のものなので一切合切同様という事はあり得ない。

上記3と4のように、互いが様々な関係の中にあって様々な影響を与えながら連なっていくことを願っています。

支援の「マニュアル」ではなく「レシピ」という表現は、各々の関わり合いや向き合う中で築かれていくもの、さらに美味しいものを生み出す事。支援という形で生業とする人たちが私の周囲には増えているが、自身の生活空間に障害当事者があたりまえに存在する社会にはなっていない。故に、あれやこれやと意識するために「支援の連続性」というタイトルで書き綴ってきました。でも、とどのつまりは障害のあるなしに関わらず誰もこの社会に存在する者どうしが連なっている事をこの先も追い求めつつ、この連載はとりあえず最終回として、次なる「支援の意識化」を図りたいと思います。

#Shienin てんごく

浜島恭子

「赤ちゃんポスト」についての記事を読んだ。

“慈恵病院では病院以外に身元を明かさずに産める「内密出産」のシステムを19年12月に開始。(中略)17年前に預かった赤ちゃんが17歳になることなどから、本人への出自情報の開示をどうするかが問題として浮上。(中略)「どちらかというとながティブな情報が多い」といい、当事者の性格によってはどう受けとめるか分からないとして、現状では多くの情報を伝えていない。ゆりかごの運営を長く続けられれば、不倫や売春による出生、「殺すつもりだった」というケースなど、子どもに深刻なダメージを与えかねない事例が出る可能性もあり、真実告知は一筋縄ではいかない。”(『毎日新聞』2024.05.24東京夕刊)

本人が知りたくないことを同意なく知らされることを避ける配慮は重要だが、本人に訊かなければよい・よくない情報の判別はできまい。中村珍ら著『お母さん二人いてもいいかな!?』(2015、ベストセラーズ)という漫画に、本人がショックを受けるかもしれない出自の情報を伝えるかどうかまず本人の気持ちを訊く場面があった。

ところで、「慈恵」はキリスト教に関わる言葉であるらしい。辞書によれば“mercy(哀れみ)とgiving/あるいはblessings(与えること)”と出てくる。

中島岳志他著(2023、かもがわ出版)『秋葉原事件を忘れない』を読み、自身が生きづらい人による(巻き込み拡大自殺のような)無差別殺人から、相模原事件のように特定ターゲット<この人たちのせいだ、この人たちがいなければ>を

発見しテロ行為を起こしていく—と変化していると受け止めた。

ALS 囑託殺人事件の裁判傍聴の報告を聴き、加害者の医師もそうだったのではないかと初めて思った。加害者本人は医療知識と技術を活用して、いいこと(“mercy killing”慈悲殺人、他人による「安楽」死)をしたつもり、そのことで自分の生きづらさを少しはまぎらわしたつもり—という面があったのかもしれない。被害者の林さんはそのような人のターゲットとしてあぶり出されてしまったのではないかと感じる。

最後に天国についての明るい話の紹介を。

“ここクロアチアの音楽家の間で、あるジョークがあります。冒瀆的に聞こえたら申し訳ない。モーツァルトが死んだ時、聖ペテロが天国で迎え、彼を神に会わせるために案内した。モーツァルトはゆっくりと道を進みながら天上の響きを聴き、想像を絶する美しい音楽だと思って感激した。それは天国の聖歌隊とオーケストラだった。そう思っている時に彼は主に会った。主は彼に言った。「ああ、モーツァルト！ああ、モーツァルト！あなたがここにいることが大変うれしい。あなたにここの室内楽を任せる」モーツァルトは少し戸惑いながらも答えた。「とても光栄です。でも…私はそのような地位にふさわしいでしょうか？つまり、バッハがどこかにいるのではないですか？」神は冷静に彼を見て言った。「私がバッハだ。」

(@LukaMagda)

<https://www.youtube.com/watch?v=3FLbiDrn81E>

(はしままきょうこ 雑読家ときどき支援員)

じゃすみん通信 ～第82回 技術 の巻～

大野沙彩(じゃすみん)

ジャーナリングの一説をここに載せようと思っていたけど、ジャーナリングノートを持ってき忘れたので、書けないんですが、だいたいでこんなこと書いたというのを改めて。最近ふと思ったんですね。私、えるぶで10年以上働いていて、何か「技術」を身につけたんだろうかと。アートの時間や音楽の時間をみんなと共有したりして、「絵を描く」「音楽を奏でる」みたいなことはしているけれど、それは仕事で身についた私の「技術」ではないと思うんです。絵を学んでいけば書き方だったり絵画の知識などあったりするし、音楽であれば楽器の演奏や楽譜を読んだりする。そういった「技術」は私にはない。私にある技術は編み物とか韓国語とかバレーボールとかかな？ 趣味的なものが多い。じゃあこの仕事をしてきて身についた技術って何だろう？ そう思うと、これといった技術と呼べるものがないなあ、なんだか寂しくなりましたよね。私、10年以上働いてきてこれといった技術も身に付けてないのかと。

でもすぐ気づく、そんなことないよねと。例えば「レフト方向にクイックのトスを上げる」とか「バタフライを泳ぐ」とか「人間の絵を忠実に描く」「ギターを弾く」…みたいな「ザ・技術」はとてもわかりやすい技術だけでも、それと比較するようなもんじゃないかなと思うんです。知的障害当事者相手に絶対伝わる言い方みたいなものはないし、正しい接し方もない。こうすれば絶対にパニックを起こさないとかいう正解もなければ、今はうまくいっていても数年後そうじゃないかもしれない。そういう現場にいると、「ザ・技術」は身につけてないなあと思ってしまっただけで、元々そういう技術を身につける仕事じゃないんだろうなと。正解のないものと向き合って、とりあえずの正解を出そうと努力し、結局正解は分からず、でも何かしらの妥協点を探し出す。そんなことをうだうだとしたら、時には諦め、でもまた考える。目の前の人と向き合って、ぶつかり合いながら人間関係を作っていく。一緒に笑って、一緒に怒って、泣いて。それが仕事なんだよなあ。そう考えると、「ザ・技術」を身につけるより、すごいことやってるよなと思ったりもします笑(比べるものではないですよ、本来！ どちらもすごいこと！)

なんか書きたいことほぼ書き切ってしまったので、雑談的になりますが…それでもやっぱり技術は身につけたいモノ。アートの時間には講師に手の描き方のアドバイスをもらったり、楽器もやりたいからウクレレを時折ポロポロ弾く。直接関係なのかもしれないけれど、えるぶのみんなと同じ時間を共有している中で身につけている、身につけたいと思ってつけた浅い技術。この仕事をしていなかったらやっていなかったことかとも思うと、ある意味仕事をして身につけた技術とも言える。あとは本当に仕事と関係ないのだけれども「英語」は身につけておきたい技術だなあと思っている。(本当に思っているだけ) なんでかということ、やっぱり英語が使えれば色々な国に気軽に行けると思うんです。コミュニケーション取れる。自動翻訳機というものもあるけれども、言葉でやりとりしたいという想いがある。あと、やっぱり、何より、かっこいい！ 笑

最後三分の一は関係ないとりとめもない文章になってしまったけれど、「技術」は身につけていないのかもしれないけれど、確実にみんなとの人間関係は積み重ねている。そのことによってわかることも多い。でも結局は正解がわからないままに、さらに積み重ねていくのみ。ですね！

【自由律の俳句を嗜む by わざおぎらぎら】

人生最悪の危機に瀕している。が、ピンチはチャンス、最高の喜機と表裏は好転したと思っている、けど移れない、足元を掬われ一気に奈落・

を避けるべくタイミングは二の足、踏むごと脆く崩れていく崖、合わない理由は温度差、当事者と「善意の第三者」というだけでなくヒエラルキー。

マサに「パンがないならケーキ」のマリーアントワネット、、、今また「夏休みにい♪どこかあ♪」とお悩み相談しとるし無邪気なこと(なでなで)。が、こっちは明日からの3食を2食に減らしうち1食をどこの炊き出しに並ぶか等々、キリキリキリキリ胃に穴・悩みなさんな、誘う頃には相手はあの世、キミは葬儀に参列だ、いうところの夏休みが何月どこ殉もとい句か知らんけどつ。

開示請求が無断(つまりは虚偽)で提供に切り替えられを閲覧したところ「いつもと変わらない様子～普段どおり」と記すは当時の担当係長。はあ？オヌシが「いつも」や「普段」がこっちの「いつも」で「普段」と思ってたか！？

って、これはイワチャンレベルでは知れた話だが、嫌いな人物の前では緊張し普段どおりではいられないためその嫌われモノはその人の「普段」に触れることはないっ！とのパラドックス。現に、厄所で対面したベテラン弁護士へお茶の質問などする笑顔に キョトン
だったろーがよ～、愚かしいこと極まりない。嘘付きは嘘に鈍感

と並列は勿体無すぎだが、幸せ者は幸せに鈍感、既得権者は既得権であることに無自覚。それでも屈託のない笑顔(というか笑声)に活力を得また希望の光をみるのである、昼下がりに消えようとも、あーあ。

モルモット葉っぱ食べて集まっていた

(を辞世の句にするのもしないのもキミ次第列者)

たこの木インフォメーション

たこの木クラブ公式ホームページの URL は、<http://takonoki.net/> です。

第一回「知的障害・自閉の人たちと「かかわり」の社会学三井さよ講座」

テーマ 「第2章 就学運動は何をとうていたのか」について

日時 7月14日(日) 13:30~16:30

場所 多摩市立関戸公民館 第2学習室 京王線 聖蹟桜ヶ丘駅前 OPA ビル 8階

参加費 無料

※zoom などのオンラインは正式な形では行いませんので当日会場に来れなくて zoom などでもみたいという方いればたこの木クラブにご相談ください。

※スタッフ横田が只今企画中。詳しくはP2-3をご覧ください。

◆会員募集募集中!

2024年度会員登録をお願いします!

たこの木会員 ¥6,000/年 賛助会員一口 ¥3,000/年

通信購読会員 ¥1,200/年 目標額 120万!!

※年末カンパもどうぞよろしくお願いします

郵便振替 00100-2-24685 たこの木クラブ

銀行振込 三井住友銀行 永山支店 普通 6424332

※銀行振り込みをご利用の方は、メール等でご一報いただくと
ありがたいです

※譲ってください

書き損じのはがき・事務用品(ノリ・セロテープ:ハサミ等)

※大量のクリアファイルを頂きました。

たこの木では持て余すので、ご入用の方にお譲りします!

たこの木関連本販売中!

「良い支援?」「ズレてる支援!」「支援のてまえで~たこの木クラブと多摩の四十年」

「知的障害・自閉の人たちと『かかわり』の社会学多摩とたこの木クラブを研究する~」

三井さよ

テレホンカード販売中:災害時、携帯よりも公衆電話の方がつながりやすい!500度数
=400円でお分けします。NTTの固定電話をお使いの方は電話料金の支払いにもご使
用出来ます。

PDF版たこの木通信(準備号~400号)DVD販売中



1987年9月に誕生して以来毎月発行してきたたこの木通信。
その想いや取り組みの歴史等々を知るために、是非ご購入下さい。

《定期の予定》

- ・毎週水曜日 13:00~18:30 すいいち企画 たこの木ひろばにて
- ・第3木曜日 10:30~17:00 たこの木通信発行作業のお手伝い募集!
場所:6月はウィータ8階第2学習室です。
(毎月部屋は変更されるのでご確認を)

<その他の予定>

- ・フィットする支援をめざす会 7月2日(火)19:30~ZOOM及びたこの木にて

たこの木通信ご投稿お待ちしております!

※B5版1枚単位でお願いします!!

※ご投稿の締切は第3木曜日発行作業日の前の月曜日です。

但し、ページ割の都合上、ご投稿される方は、発行月の前月末までにご連絡を!

※連載記事も歓迎!通信の感想や日々の出来事や想い・イラスト等なんでもOKです。

※YouTube たこの木チャンネル開設中!

※詳細は、たこの木ブログでご確認ください(<http://takonoki1987.seesaa.net/>)

※水曜日のすいいち企画の時間以外は、個別の対応でたこの木ひろばは留守がちです。ご相談等がありましたら事前のご連絡ください。

※通信発行作業を手伝ってください。

毎月作業場所が変わるため、午前から来られる方は、多摩市関戸公民館印刷室に。午後からの方は市民活動支援センター受付で場所の確認をお願いします。

お手伝いいただける方は事前にご連絡いただくと幸いです

※発送作業会場までの送迎を担ってくれる方急募!

作業場所の変更に伴い、会場へ一人ではいけない人がいます。

第3木曜日 12時半~13時間で、送迎ボランティアが可能な方ご連絡下さい
できる月のみでも結構です。

●たこの木通信PDF版お届け中:通信のページ数並びに発行部数が増え続ける中、
よろしければPDF版で受け取り可能な方はお申し出ください。

『暗闇のなかの希望』(文庫版その2) 希望とは？

(「ほんの紹介」76回目)

前回に続けて取り上げるのは『暗闇のなかの希望』(文庫版)、暗闇のような社会の話は前号にも書かせてもらったが繰り返して書いてみる。

- ・終わらないどころかひどくなる戦争
- ・止まらない温暖化・気候変動
- ・政治に背を向ける人の多さ
- ・飢えや治療可能な病気で亡くなる人の数

ぼくたちは、この時代の、そんな世界に生きています。「希望」をどこに見つけることができるだろう。そんな思いを抱きがちなぼくに、この本の冒頭(第三版への序文)で著者のレベッカはこんな風に呼びかける。

「あなたの敵は、もう希望はないとあなたが信じることを願っている」

変わりそうにない、こんなひどい社会をひどいものとして認識することは大切だと思う。軽々に希望を語れる状況にないということも。

希望をもつということは、こうした現実を否認することではないと言いつつ、レベッカは希望を語る。「社会なんて変わらない。無力な自分に出来ることなんてない」と誰もがあきらめたら、社会はほんとうに変わらず、ますますひどい方向に突き進む。

この本では「希望とは何か」ということがいくつかの表現で描かれている。たくさんあるが、引用してみる。

希望は、私たちは何が起きるのかを知らないということ、不確かさの広大な領域にこそ行動の余地があるという前提の中にある。

(19頁)
希望とは未知や不可知のものを受け容れることであって、確信的な楽観主義や悲観主義とは違う。(19頁)

希望とは、いつ、どのように意味が生まれ、だれや何にインパクトを与えるのかあらかじめわからないとしても、それでも私たちの為すことに意味があると信じることだ。(20頁)

希望は枝、記憶は根(28頁)
希望は未来にかかわるものだが、その礎は過去の記録と想起にある…。(28頁)

物事は常に良く変わるには限らない。しかし物事は変わる。行動しさえすれば、私たちはその変化の中で何らかの役割を果たすことが出来る。その変化こそが、希望や、記

憶、すなわち私たちが歴史と呼ぶ集合的な記憶が生まれる場所なのだ。(29頁)

希望はソファに座って宝くじを握りしめながら幸運を願うこととは違う…。希望とは非常時にあなたがドアを破るための斧であり、希望はあなたを戸外に引きずり出す(47頁)

希望は、単にもうひとつの世界は可能かもしれないということにすぎず、そこには約束も保証もない。希望は行動を求める。希望がなければ行動はできない。(47頁)

希望と行動はお互いを成長させる。(59頁)

また、劇作家だった頃(つまり大統領になる前)のチェコのパヴェルの文章が引用されている。当時彼は収監されていたらしい。

囚人という、とりわけ希望のない状況で私がよく考えている希望とは、世界の状況ではなく、何よりもひとつの精神の状況だと理解している。私たちが内面に希望を持っているか、それとも持っていないか、それは魂の次元であって、必ずしも何らかの世界の様子とか状況の理解に左右されるものではない。希望は予知することではない。それは精神の方向性、心がどこに向いているかだ。…。

レベッカは同時に偽りの希望についても言及しプロットを引用する。『希望の原理』のなかで彼は「欺瞞的な希望は人類に最大の悪を為し、力を奪うもののひとつ…だ」という。例えば、米国の引き起こす戦争が正義で平和や安定をもたらすものだというような偽りの希望。

ほんとうの希望と偽物の希望をどう見分けるか？ 例えばSDGsには両者が入り混じっているように思う。でも、そんなに難しく考えることもないかもしれない。間違っていたら、改めればいいのだから。

ともあれ、この本には人々が行動することで権利を勝ち取ったり、社会を動かしてきた例がいくつも書かれている。社会運動は世界がもっとひどくなることを押しとどめている場合もある。

不完全燃焼で、社会はこんなにひどくて、周りには無関心な人が多くて、希望なんてあるのかと思いがちなぼくがいるので、「もう、全然だめだなあ」とか思ったときに取り出して、読むといいのだろうなあ。

つるたまさひで(相談支援事業所ここん/丸木美術館/PP研/知的障害のある人の自立生活について考える会)

世界の片隅で支援をつぶやく 111

どんまいどんまい(Don't mind.)

～社会的養護で育つ子どもたちの暮らしの場所から～

長瀬 翼

先月たこの木通信を書いてから1ヶ月しか経っていませんが、半年分くらいを圧縮したような密度で、まるで嵐の中を駆け抜けていったような日々でした。今年は夏が来る前にすでに夏バテ状態です。気がつけば普段自分が習慣としてやっていることも崩れ気味になっていました。それが急転直下の展開で嵐は過ぎ去っていったので、ちょっとずつと散らかったものの後片付けをしています。具体的なことは書けないのですが、この仕事の難しさを痛感した1ヶ月でした。本当はここで過去形にしてはいけないのですが、かなり大変だったので、いったん「お疲れ自分」とねぎらいの言葉をかけています。これからが夏本番なので、今から夏仕様の装備を整えています。

先日、玄関前の庭の草がボーボーで生い茂っていたらしく連れ合いから高い所の手入れをやんわりと頼まれました。時間を区切ってやったら良い気分転換にもなるそうです。まあそれならちょっとやってみるかと思って仕事前にやっていたら、見知らぬ老夫婦から声を掛けられました。

「庭のお手入れお疲れさまです。最近希望のない社会ですが…」と始まりだして何のことかと思ったら「この水晶があれば…」と切り出しました。

僕はこの後仕事で忙しいのでと断ると、「それではまた来ます」と言うので、「そういうのに僕は全く興味がないのもういいです」と答えて、この希望の欠片もない絶望の推奨話を打ち切りにしました。連れ合いの言う通り、確かに気分転換にはなりました。やれやれだぜ。

さてと、今日は宿直勤務の日です。いつものように時間ギリギリになり、慌ただしく自転車に飛び乗って下り坂をくだっていくのでしょうか。

ではでは、「アディオス・アミーゴ！」

「仕事2」61

仕事にも慣れ、次のステップに移るべき時期に来た。

相変わらず、ゴミ拾いではあるが日数を増やしてもらおうかと考えている。

同じ職場で仲良くなって来た人もいるし、もう少し続けて行こうと思っている。

職にあぶれるよりまだと考え頑張っているが、士気が上がらない。

もっと自分の可能性を追求したいとも思ってしまう。

とりあえず、続けてみてどうなるか？結果を急がず頑張りたいです。

鷹野 洋(がんのひろし)

CVVの当事者スタッフ、介助者 CVV(Children's Views and Voices)とは、子どもの視点と声を大事にしながら、養護施設などで育った経験のある人たちをエンパワメントすることを目的に活動している団体です

『社会的養護の当事者支援ガイドブック
CVVの相談支援』

Children's Views & Voices+長瀬正子著

頒価：900円

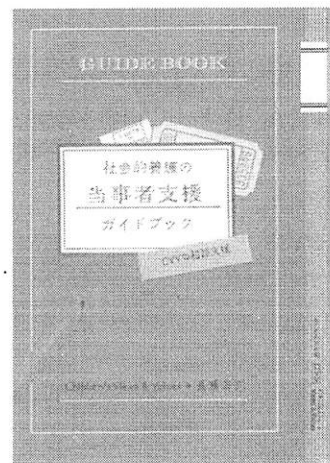
問い合わせ

大阪市北区西天満4-1-4 第三大阪弁護士ビル
503号 葛城・森本法律事務所内

CVV事務局

TEL：06-6130-2930 fax：06-6365-1213

MAIL：yes_cvv@yahoo.co.jp



行ったり来たりして考えていることなど7

井上武史

前号は、ここコロンビアのボゴタで、ぼくらがコロナ禍から展開しているラテンアメリカの自立生活のネットワーク、Red Latinoamericana de Vida Independiente RELAVIN がこれまでzoomを使ってオンラインで活動してきたのを初めて実際に顔を合わせる集会を開催中であつたため一回お休みさせてもらいました。これを執筆中の現在は6月14日、まだボゴタにてこちらの自立生活センターの立ち上げを支援中ですが明日空港に向かって帰国します。

さて、前は「ちょうどそんな流れに呼応するように、ぼくはこのためジュネーブに経とうとしているまさにその時に、メキシコのある方よりメッセージをもらったのでした。」という一節で終わってつづきになりました。メキシコのある方というのは、カルロス・リオスさん、ヒューマン・ライツ・ウォッチで障害者の権利擁護の仕事をしている障害当事者です。2010年から14年まで国連の障害者権利委員会の委員もつとめていました。

前号で触れた、メキシコの「障害者運動」を広めるために作ったWhatsAppのチャットグループで知り合ったと思います。その後、彼がウルグアイのケアサービスを調査しに行く前に少し話したいというのでzoomでも話しました。こちらはほとんどの国がスペイン語で通じるのでこうあっていろんな人がつながりを広げて共同で作業をしています。

カルロスさんは、これも前回触れたぼくがジュネーブに発つ前に連絡をくれ、ちょっと急ぎの様子だったので、帰国してすぐに連絡したのでした。ラテンアメリカでは今、どの国でも例外なく日本の介護保険に基づくペルパー派遣制度の導入が急ピッチで進んでいます。こうした状況は数年前から少しずつ現れて来ていて、ぼくは日本のちょうど、2000年から2003年あたりがあると説明していました。

コロナ禍があつて、全世界的に「ケア」や「ケアワーカー」というものが人間の存在にエッセンシャルであるという認識も広がりました。フェミニストの運動がとても盛んであることもすでに前回触れましたが、日本で上野千鶴子さんが熱心に取り組んでおられたように、家庭からの女性の解放運動として要求し、それが国連女性を動かし、ILOがラテンアメリカ全体に声をかけながら職業としてのヘルパーの導入を目指しています。

昨年、カリブ海にあるドミニカ共和国でパイロットプロジェクト的に導入が始まっており、この国連女性、ILOのラテンアメリカ事務所、BID米州開発銀行、フランス政府などが関係者として名を連ねています。ラテンアメリカで導入されようとしているのは「統合ケアシステム」と呼ばれるもので、原則的には障害者を含む子供から老人まですべてのケアを必要とする人を対象にするはずですが、どこでも障害者は後回しになっています。このドミニカ共和国でも、後づけでコスタリカから首都のサンホセで自立生活にかかわって来たダマリスさんが講師として招かれて障害者の権利についてアドバイスしに行ったような経緯でした。

カルロスさんが連絡をくれたのは、メキシコのアリスコという州でこのケアサービスの法律を審議するとき、まったく障害者団体に相談することなく進んでことに危機感を抱いてのことでした。ぼくらのラテンアメリカの自立生活、障害者運動のネットワークと連携して対案を出して、各所とこのシステムに障害者のケアサービスも盛り込んで進めるように交渉したいことでした。ちょうどカルロスさんと話した翌日がラテンアメリカの自立生活ネットワークの定例会議であつたので彼を招待して、このアイデアをみんなにも聞いてもらい、さっそく草案づくりの共同作業に入ったのでした。国連高等弁務官事務所で障害者の権利を担当している、これも頸椎損傷の当事者であるアルゼンチン人のファクンド・チャベス氏はジュネーブにいて障害者の立場で、こうした立場の違いを「調和」させる案を提出していたので、これをベースに案を作ることになりました。

日時 達也(それから)

達也の最後となったライブのDVDが届きました。それと共に写真、数人の手紙、写真入りの寄せ書が書かれた色紙が入ってきました。そのどれもが達也への思いが書かれていて本当に皆さんに愛されたんだなあと改めて知る事になりました。ライブはあかりちゃんを思う気持ちがいかりと伝わりつつ私に今迄に聞いた中では最高の声も届いたと思います。自信たっぷりの落ち着いた歌でずっと本人もルンレンの虫もだと思っていただけではないでしょう。中々バンドバックに一人でステージに立ちマイク持て歌うなんて事はチャンスがなると経験できなかった事(カウヤとは違う)声を出すことでストレス発散にもなっていたらこの様な事が出来る事業に適合したことは幸せだったと思います。それがDVDになり本人含め知人に見てもらえ、後まで残るといふとても貴重な姿を残してくれたスタッフさんにお礼を申し上げます。多度市の方ではここまでのところは無いと思うので本当に良い所とつながってラッキーだね。時々みえます。私共は、私がまだ悲しみの中にいるのではなかと心配していた位の方のいらいやりのようですが悲しみはなく坦々と過ごしています。それより夢にも出てこないのだーいい好きだった父親と二人仲良く好き放題に過ごしているのではと勝手に思っています。16年前少し早いのには思っていた父親の死もやっと父親の役目を果たしてくれているのかなと少々安心もしています。

障害児として産まれたけれど、とてかわいく色々な所で、かわいがるかたが、小・中・高は地域の中学でまわりを見ながら、特に大きな問題はなく通っていた。中学の時、弟が中1になり、そこから色々な事があった。弟が達也の事であんなに言わぬいじめらるる始まった。もう「達也を家から出さな」とか、「あいつを何ともしろ」とか言いはじめ、気の弱い弟は外で発散できなく家の中で暴れまわらした。弟に家でいじめらるるのでも、家に帰りたくなくなつた。病院に入院させたり、夜だけ病院に預けたり、ウイフリーステーション借りて母と2人暮らししたりした。本人は家は嫌で、^(帰りたくなさ)道路に大の字になってみたり、家に帰って来なくなつたり、^(弟をみて泣いた)自分も暴れてみたり。その頃、たまたま達也君にともら、たお小遣いを母の財布に入れているのを見つて、あのお金は自分のだと言ひ、母の財布からお金を取るようになり、注意していった。しかし、お金が何であるか、解らない本人にしたら、どうだ「お金があんなに孝に帰らなくとも済むのに」(T度お世言合になつた、たところ、発覚して本人が言つた言葉)と。そのお金の、お父さんの財布に手をつけることか、せまりお金のあんな希望にかたう、自分の生活を守つたのに始めたこと。弟はとりあえず入院、退院後、障害者となり、足時計の高技障害。不意の時からの笑顔は消え、声も小さくなり、過去の人は誰も知らないという。家を出てパート(村人恐怖症の、1人23年仕事)をして生活している。姉も含め、姉の人、思いにもまらぬ大変な生活をしてきた。親の力不足で、弟に寄りそう時間が足りなかつた事、本当に申し訳なかつたと悔いている。

今回で100投稿目 by あ

8年前の春から通信に書き始めた。世の中には「言語化脳」の人がいるらしくて、考えたことをさっさと書ける。自分にはできないので毎月けっこう大変だった(原稿を待ったこの木のお二人はもっと大変だった)。ただ、明け方、コーヒーと焼酎とお菓子を連続補給しながら、ときには謎の高揚感につつまれながら書いていたので、どの原稿も愛着がある。5年前の文章でも、読めば当時の心境や感じていたものまで思い出せる。これほど「何を書いても指摘されない」媒体はなかなか無いと思う。もし投稿を考えている方がいたらおすすめします。100回、8年続けて分かったことは「反響がない」ことだ。もう全く無い。自分のコンテンツの無さと実力が判明した。反応を「気兼ねせずによかった」とも言える(言いたくないけど)。今回「これまでを振り返る」というお題にしようと考えたけど、そのテーマは「読まれている前提」を含んでいる気がして胸に軽い痛みを覚えた。これまで通り『日記』を書きます。

「犯罪をした障害のある人の支援」についての研修を受けた。対面で、事前課題として「支援計画」を作っていく。事前に渡された数枚の「ケース情報」だけでは足りないのので、自分で設定を補って作る必要があるが、できなくて正直に不足したまま不完全なものを書いて出した。グループの4人分コピーして配布され意見し合う。まずい、こんなに晒されると聞いてなかった。早く済ませたいと手を挙げて説明を始めると、遮るように向かいの方から指摘が飛んできた。

「これでは全然だめだと思います・まず、ここにコレは書くことじゃないですね」

スママセン・ちゃんとやってませんでした・あれ、手元で手を動かしているのは「メモを取ってる」んじゃないか「ぼくの計画案を横線で消してる」んですね！他にもいくつか指摘が続き、ぼくよりも、他の2人がうなだれていた。2人はまだ実務でやったことがなく不安でいっぱい。指摘したMさん(マウントのM)は、その流れで自分の経験を話した。OJTとして付き添ってくれる先輩のAさんが厳しい人で、しごかれながら、無茶振りを必死にこなし、役所や事業所相手に断られても食いが下がって・「でもAさんが居たからやれた・」と会議室のすみにいるAさんに視線を向ける。

未経験の一人「話を聞いてると、自分にできるのか不安です・本業で時間も取れないし、連携先と交渉したこともないし・」Mさん「大丈夫できるよ！確かにこんなこともあって大変だったし、あれもギリギリで何とかやったけど、やっぱりAさんが厳しいから・頑張るしかなかった」二人とも(この研修は何とかしのぐけど、絶対案件はうけないぞ！)という決意がにじみ出ている(と思う)。この研修の目的の一つが「未経験者の受任のハードルを下げる」なので主催者側のAさんはがっかりしてるぞ。

炎上した広告のマネですが、Mさんの声は男性でしたか、女性の声でしたか？未経験のお二人は気の毒だが(フォローはちょっとした)、個人的には女性のMさんがステレオタイプな「男性性」全開の振る舞いでうれしくなってしまった。「序列」を強調するのも抜けがたい。終わってから話しかけて少し知り合いになった。

ちなみに「裁判官も検察も分かってるから不要」と横線で消された「犯罪行為の経緯」をまとめた項目については、研修の後半に、講師から「判決後に刑務所などに計画が引き継がれるときに『この人は何をしたのか』が分からないことがあるから、書くようにしてください！」と指導があった。「よっしゃー！ざまー」と笑みがこぼれるのを抑えるのに苦労した。

「どっちもどっち論」にしたいわけではない。自分は多数派の「男性」だけどキャラ的に弱いので相手のいろいろな面が見える。ある属性の集団にもいろいろいる。そういう調整はしたい。東京に出てきてすぐに通信に書き始めた。ずっと「運動への憧れ」があって「本場」？に出てきて、それは今も変わらない。「実践者」には向かない気がするが「役割」はあると思っている。「運動」には「ブレーキがない」のが強みであり危うさだと思っている(資本主義の強さと似ている)。「ブレーキが壊れた人」がリーダーに向いている(批判でなく「憧れ」を含んでます)。車にブレーキが付いて「より遠くに行ける」ように、初心を思い出していろいろ試してみたい。

「あ～～勘違い」

岩橋 誠治

○朝介助に入ると、自ら髪をかき揚げジェスチャーで語る重度知的の当事者。

「ほうほう。散髪したのね！さっぱりしたね！」と声をかけると、

「そうだそうだ！」と言いたい事が伝わった感の当事者。

伝わった喜びのあまりの事だろう。介助中に何度も繰り返し主張するので少々うざったく思えた刹那。

「岩ちゃんも散髪に行けてこと？」と言ってみたら、相打ちしてそれ以後繰り返さなくなった。

○マンガ本を二冊開いて交互に指さす自閉症の当事者。

「ハイハイ。おしっこのシーンね」「ハイハイ、そっちも同じくおしっこのシーンね」と応える私。家事のため台所に立っていると何度も手招きされて同じことを繰り返す。ちょっとイラっとしつつもぐっとこらえる私。

トイレを借りた時、家主の家ではいつも便蓋が閉まっている事に気づく。そういえば、家主が入った後はいつも蓋が閉まっている。もしかして…

「岩ちゃん！トイレの後は蓋をしろって事？」と聞くと聞けば、激しくうなずく家主。

「申し訳ありません」と謝る私。

○乗り鉄の当事者とのガイヘル。

朝からいろんな電車を乗り継ぎ楽しむ自閉症の当事者。帰る時間が迫り、そろそろ自宅方向へと駒を進める画策をする私。でも、真逆の方向へと向かう当事者に、「そろそろ時間だから帰ろうよ」と声をかける。「そうだね」と言いつつ行く手は真逆。

「しかたないなあ～。今日は時間延長か？」と思っていたら、きっちり時間通りに帰宅。都会の複雑な路線図を熟知している乗り鉄さんに脱帽。

○「あれ？」と突然首をかしげる身体障害の当事者

当事者に言われるままに車いすを押す私。知らされた予定ではこの後帰宅する事になっているはずなのだけど…。自宅に向かう路地を曲がらずひたすら真っ直ぐ進む当事者。どこか立ち寄る場所があると思い描き押し続ける私。

かなり行ったところで「あれ？」と言われ「何んでしょう？」と聞けば、「自宅ってどこだっけ？」と言う当事者。入所施設から出て間もなかった頃。街中にはたくさんの路地があるという事も常識でなく、曲がる所を覚える必要があるとも知らずに起こった事象。

当事者自身は解っていると勘違いしていた私。「判らなくなったら聞いてと伝える」

長年当事者と関わっているものの「あ～勘違い」というのは多々ある。「勘違い」と言えるのは常に気づいた後であって、気づかなければそれが「当然」と思って当事者と付き合っているのだろうと、勘違いの数だけ思える。

そして救いなのは、長年の付き合いの中である面「岩橋は頼りない面がある」と理解してくれていて、ある面許しを得ているところ。

それに甘んじず、当事者が理解していることを理解する事に努め、関わり続けたいと思う。

KAT-TUNDIRTY
[SEXY, NIGHT
「パパラチ」 「ツイナマイク」
「ツイガ」 「ワールド」 「サバイバル」
「ジーミー」 「正反合」 「呪文」

荒井聡子

理乃さん。朝飯を終えて、休憩してる。今朝は眠くない
みたい。表情がいまいきしてる。

「車椅子に移、てみる？」

もうすぐ 聡子さんから仕事に出かける。

「玄関まで 聡子さんを見送りに行こうよ。」

車椅子に 理乃さんと乗せて玄関へ。聡子さんが

「理乃さん、行ってくわね。」と言った。

行ってら、しゃい。

理乃さんも 出かけられりかな。

「シャンプー あと もう ち、と になつてから、

買いに行こうよ。あしたの 椿油の、いいと

和田さんが 言うてた。」

理乃さんは、(ペチャリとした目と、しかり私と見てる。

何か言いたげだ。一瞬、「うん」とも「ん〜」

ともわからず、声が出た。久ぶり、理乃さん

の声。「出かけてみていい？」

外はくもり。明日は 雨かもしれない。逆に暑

くなるかもしれない。

外に出ると、理乃さん、短いけれど声が出ている。

うわい。どこから甘い香りがある。

「どこかに うすナシの花が 咲いたわ。」



聡子さんが今
ピアノで弾いてる曲たち

ミニバスのバス停で
バスを待つ。こぼれ
種を蟻が運んだ
のたうか。歩道の
縁石のスキマから、
矢車菊が生えて花が

ゆれていた。ホーホケキョ。まだ鳴いてる。あ
たまたま通りすぎる車。理乃さん 眠っていた。
「理乃さん、ベントに戻ろう。うちに帰るわ。」



午後も涼しかった。理乃さん元気。もう一度
外に出てみた。「ねむの木のところまで」
トンネルの先の。

足もとに、ホタルブクロ、アカツメクサ。向う
には背の高いアザミ。くもり空によく似
合うピンク。トンネルの入口には、今年も葛の
つるが上からたれ下がっている。

理乃さんには何か見えてるの？ ねむの
花は高いところに咲いてる。見えてかな。
この世界の 一員である理乃さんとみんなに
紹介して、みんなに理乃さんと交感(感)し
ほしい。

フィットする支援をめざす会

「八尾事件を考える会」との交流会

荒木

6/1に、久しぶりに東大阪の「八尾事件を考える会」の皆さんと話しました。2018年8月にフィットのメンバーで大阪を訪問してから、もう6年が経とうとしています。当時は、八尾事件のYさんが2度目の服役から戻ったところで、大変な時期だったと思います。すぐにコロナ禍が始まり、最低限の連絡のみで「交流」は止まっていました。この年明けに冊子が届きました。「考える会」の編集者が「載せられるギリギリのところまで書いた」と言うくらい、量も質も充実した報告書でした。読み応えがあって、すぐに「読書会」を開いたほどでした(たこの木事務所で読めます。岩橋さんが追加注文しました)。

フィットのメンバーから「聞いてみたいこと」がたくさん挙がってきて、こちらから「久しぶりにお話を聞けませんか？」と提案し快く受けてくれました。今後も「細く長く」交流を続けたいことからオンラインとしました。似た課題と「考え方」を持つ、本当に数少ない「仲間」だと(一方的に)思っています。間隔は「一年」なのか「半年」なのかは決まっていますが、続けていきたいと思えます。ただ、一回目をやってみて「対面が話しやすい」という意見が多く、「次は大阪に出かけようか」という話も出ています。

「八尾事件を考える会」が解散することになったのは、長い期間、警察沙汰といった大きなトラブルが起きておらず、Yさんの生活が安定してきたことも一つの理由でした。報告書を読むと、それは「様々な工夫・手法を取り入れた成果」だったのだろうと感じました。しかし、直接話を聞くと「こうすれば良くなった」という単純なことではありませんでした。暴力が完全に止まったわけではなく、その激しさは前ほどでないものの起きていました。精神科の地域生活支援で使われる(と思う)「クライシスプラン」については、手法の話が好きな私は期待していましたが、「使ってみたものの、本人には合わなかった」と話していました。

「落ち着いた理由」も、一方で変わらず不安定になるYさんについての「理解」についても「本当のところは、わからない」と話されていたのが印象に残りました。もちろん、本人とのやり取りや引き継ぎ方法、自宅・通所での環境設定など、普通の所ではできないくらいの試行錯誤と根気強い支援をされた上での「謙遜」でしょう。ただ、それ以外にも、加齢による「体力・過敏さ」の低下、精神薬の作用、長い付き合いでの「信頼・安心感」としか言えないもの、など様々なことが関係しあって「一言では言えない」実感だったようです。

Yさんのグループホームの近所の人について「Yさんが事件を起こしたことを知っている人もいるが、特に話題になることもなく(荒木:おそらくYさん含め)利用者・スタッフとあいさつし合う関係」ということでした。短いエピソードでしたが、Tさんの将来の生活を考える時の、貴重な「生の情報」でした。

毎月オンラインでやっている定例会をのぞきにきてください。【7月は7/2 19:30-21:30です】連絡先: takonoki@dream.jp (横田 宛) また、面会の交通費が足りません。少額でも助かりますのでカンパをおねがいします!

ゆうちょ(郵便局から)00130-7-359996(銀行から)〇一九店 当座預金 0359996 名義:フィットする支援をめざす会

NPO 法人あしたや共働企画第22回通常総会報告

5月26日(日)あしたや共働企画の総会が行われました。2023年度の活動報告、決算、監査報告、定款の変更、2024年度活動方針、予算、すべての議案が承認されました。

2023年度活動報告では、障害福祉サービス受給者証を持つ人の時給を上げることができたこと、予算を越えた売上があったこと、研修として共同連全国大会に参加したことなどが出されました。

今年度は議案に会員制度の定款変更がありました。年会費を設けることにより資金的に法人を支えていただきたい。特別会員をなくし、正会員と賛助会員のみとして全会員から年会費を徴収する

今年度活動方針では、あしたやの土台を作ってきた人達が多く抜けた後、安定的な運営をしていける体制を整えていくことが大きな課題であると出されました。

「共に働く」とは何かを日々の現場、運営、関係の積み重ねの中で実現していく。常に情報交換や意見交換をし、共有してゆくことを大切にする。「共に運営」の基本として、会議や仕事の場で話し合う関係を大切にするなどが出されました。

広報では、通信「あしたの風」について、年4回発行を3回にすることが出されました。理由として、次の担い手の負担軽減と経費(通信費の値上がり)のことからと出されました。

会場からの意見を以下簡単に紹介します。

- ・大きな節目を迎えた総会。事業売上をさらに上げることは、新しい人たちの中で、どういうイメージか、賃金の差が開く中をどうとらえるのか。理念を有名無実化しないようにどう実現していくのか。

- ・同一賃金への道のりは遠い。手放すのは楽だが、それがつらい。方向性は見失いたくない。

- ・共に働くという理念 地域に働きかけること、地域に根ざすことは、あしたやに行けば食べ物のお話も聞ける。食べ物は命につながっていること、いいものを買いに來る人をふやしていくことが地域に根ざすことである。

- ・あしたやが変わっていく中で、あしたやが何をやってきて、これから何をやっていくのかゆるやかに検証していけばいいと思う。

以上報告です。

今はまだ途上ですが、新しい仲間と共に志を失わず力を合わせて歩みたいと思っています。これからもよろしく願いいたします。

(村松・谷岡)

も く じ

・表紙	1
・第一回「かかわりの社会学」三井さよ講座のお知らせ	2
・「新措置制度精度」に抗するには	4
・社会に向けて その3	7
・「もう6月だ」	8
・支援の連続性を考える 最終回 ～終わらない連続に～	10
・#shienin てんごく	11
・じゃすみん通信 ～第82回 技術 の巻～	12
・【自由律の俳句を嗜む by わざおぎらぎら】	13
・たこの木インフォメーション	14
・『暗闇のなかの希望』(文庫版その2) 希望とは? (「ほんの紹介」76回)	16
・世界の片隅で支援をつぶやく 111 ～どんまい (Don't mind.) ～	17
・「仕事 2」61	18
・行ったり来たりして考えている事など 7	19
・目時達也 (それから)	20
・孤独の研究5 入間川の家	22
・あ～勘違い	23
・荒井聡子	24
・フィットする支援をめざす会	26
・あしたや共働企画のページ	27
・もくじ・編集後記	
ねじり草 第183号	
・すいいち日記	2
・最近のすいいち企画	4

編集後記

・最近の郵便事業の影響で、たこの木通信が届くのは週明けになるとの報せを当事者たちからもらう。

・当事者って結構たこの木通信によく目を通してしていると感心する。見ているところは、インフォメーションと〇月〇日という文字をひたすら探している様子。その心は、何かイベントがあれば参加したい旨らしい。

・会話ができる自閉症の当事者たちとのやり取りは実に学ぶことが多い。私自身の常識や言葉の理解ではなかなか理解できないのだけど、言葉を変えやり取りを変え場面を変えたところで話を聞けば、様々な誤解を基にやり取りが続いていたことを知らされる。ある程度誤解が解けてやり取りを重ねると全く別ようの景色が現れることしばしば。そしてその景色さえ新たな誤解がある事を後々に気づかされる せ

発行人:障害者団体定期刊行物協会
〒157-0072 世田谷区祖師谷 3-1-17-102
編集人:たこの木クラブ
〒206-0025 多摩市永山 1-1-4 ルミエール 103
☎/☎ 042-389-1378
定 価:100 円